

スタジオ夜話

第85話 スタジオ夜話

「音へのこだわり」 I

おかしなお話

☆ はじめに

先月にも同じことを言ったのですが本当に世の中大変なことになっています。

4月7日に発令された緊急事態宣言、新型コロナウイルスの感染拡大が止まりません。政府は5月6日までの宣言の期間の延長を検討、一部の専門家はこの感染の拡大は1年以上続くとも言っています。どうしましょう？発表されている感染防止対策はもちろんですが、私たちに出来ることは、ひたすら体調管理と自己免疫力の向上を目指すしか手はありません。読者皆様も自己免疫高め頑張りましょう！

さて今回のスタジオ夜話、予告の通り「音へのこだわり」 I おかしなお話です。スタジオ夜話本来のスタイルでお話します。お付き合いよろしくお願いたします。

☆ サウンドドラマの制作？その師匠

筆者は40年以上にわたりサウンドドラマ制作の研究と実際の制作を手掛けてきました。研究の師となる人物は学生時代からの恩師で英米文学の研究者、文学博士の並河 亮（なみかわ りょう）師と元毎日新聞記者、文化放送出身、日本大学教授の呉正恭師の二人です。

両師とも非常に個性豊かな人物でスタジオ夜話のお話をする。元ネタ？は両師との研究活動の成果？も大きく影響しているといまでも感謝しています。

今回の「音へのこだわり」 I おかしなお話は、両師の紹介から始まります。音とは直接関係の無い話のようでも、いづれその関係が見えてくると思います。お付き合いをお願いいたします。

◆ 並河 亮

『ウィキペディア (Wikipedia)』で見ると来歴で、島根県生まれ。東京帝国大学法学部卒。NHK 国際部、毎日放送に勤務。日本大学教授を務めた。ドス・パソスの『U.S.A.』を唯一完訳したほか、アプトン・シンクレアなどの翻訳、放送台本、評論がある。とあります。

確かにその来歴に間違いはありませんがウィキペディアの記述を基に読者皆様がその人物を想像すると来歴から想像する人物像とは違った人物像が見えてくると思います。

特に著書の中の石崎書店刊「放送の台本と演出」はかつてはサウンドドラマ制作のバイブルと呼ばれ、筆者に限らず多くのラジオドラマ制作関係者に愛読？されてきました。

また並河師はジャズにもその造詣が深く、ラジオドラマ脚本「三日月の町の物語」文化放送 1970年2月22日放送、晩年には同じテーマで毎日放送 TV ドキュメンタリーでニューオーリンズを訪れ映像制作も手掛けています。

またブームになったシルクロードものもの先駆者でもあります。著書「シルクロードをゆく 仏 インドから日本へ」はシルクロード研究者の必読書です。有名なシルクロードの写真家「並河万里氏」は息子さんです。筆者は学生時代から授業終了後お住まいへ帰る途中の渋谷、井の頭線のガード下で毎週面白おかしい話をお酒をいただきながら伺っていました。

今回のスタジオ夜話ではそのお話の一つ「女優グレース・ケリーはサンダルが好き」読者皆様は女優グレース・ケリーをご存知でしょうか。筆者は60代半ばを過ぎてい

ます。筆者以上の年齢の諸先輩方々は「知っているあたりまえだろう」と言われます。

マリリンモンローと同時代に活躍した女優です。女性のブランド好きの若い方にはエルメスのバーキンに並ぶケリーバッグとして有名です。

モナコ王妃になったグレース・ケリーが使用したバッグとして有名です。1936年に誕生した当時は「サック・ア・クローア」と呼ばれていましたが1955年ごろからグレース・ケリーにちなんで「ケリー」と改名された歴史があります。ひょっとすると若い男子はグレース・ケリーを知らないけれど女性には有名かも知れません。話は戻ります。

かつて並河亮師は文学者、歴史学者、として海外でも有名な人物でした。映画で有名になったダン・ブラウンのダビンチコード、主人公ロバート・ラングトン教授的な人物です。当然各界の有名名人との面識もありました。多分日本文化愛好者の王妃が元国連大使の澤田を通じて知り合ったと思われる。

師がモナコを訪れた際にモナコ大公宮殿？にふらっと立ち寄りました。門に立つ護衛の兵に「日本から並河が訪ねてきました」とダメもとで伝言した。待つこと10分、ご本人がサマードレス姿で門のところまでやって来たそうです。お話の中でその気さくな王妃の印象が伝わってきました。筆者にはそのお話を伺ったとき（場所は話にそぐわない渋谷のガード下、井の頭線が独特の音で頭上を行き交います）颯爽と歩くサンダル姿の王妃の印象が映像となってイメージとして残りました。

映画ローマの休日的、印象映像です。今でも高架下の設定で効果音を考えると、並

河亮師、ロバート・ラングトン、グレース・ケリー、オードリー・ヘップバーン、とイメージします。

今回はもう少し詳しく師のお話とサウンドドラマの音について関係性をもって紹介します。

◆呉 正恭

立教大学卒業、毎日新聞社に勤務。その後文化放送出向、ラジオ関東創設メンバー(現ラジオ日本)映画の脚本執筆、日本大学教授を務めました。なんとなく並河亮師と経歴は似ています。

ラジオドラマを手掛け、脚本執筆、音楽好き(クラシックもジャズも好き)経歴や趣味などは似ていますが性格はラングトンに対してはインディアナ・ジョーンズ的な感じです。筆者はかつて呉師とスタジオ作業のほとんどを一緒に行っていました。呉師は戦後一時期を無職で過ごしアルバイトで趣味のフルードで日劇の楽団員をしていたそうです。

近くにあった毎日新聞の記者募集の張り紙を見て入社に至ったそうです(いい時代でした)社会部勤務、警視庁詰だった時代に帝銀事件が起き、いち早く現場取材した話など色々です。

映画脚本執筆は文化放送出向時代、日活のニューフェイス石原裕次郎を売り出す企画でラジオドラマ制作(この頃はTVではなくラジオだったのです)裕次郎がラジオドラマに出ていたのです。併せて映画ではラジオプロデューサー役で出演「清水の暴れん坊」麻薬取引のアクションもの、呉師が原案です。自身の経験を活かしたものになっています。

また筆者と一緒に作業したスタジオでも



騒音や雑音の中でも、素敵なお話は心に残っているものですね。また、同じような音が聞こえるとその時の光景が蘇るものです。(mo)

面白おかしいことを言っています。スタジオでサウンドドラマ制作の最中、効果音の設定で筆者に「森田・・・ここで登場人物が後ろから近づいてくるのだけど・・・気配の音って創れるかな?」「気配ですか?」「そう、足音とかの具体的な音ではなくて空気感っていうか・・・」筆者はいまだに「気配の音」創れていません。間違いなく気配って感じるのですが、なんなんでしょう?

また筆者の勤務していた、呉師と共に作業していたスタジオには、当時 STUDER の 8TR マルチレコーダーがありました。

また当時は、4CH ステレオがブームでモニター環境も 4CH に対応していました。

昭和 50 年当時、今から 50 年ぐらい前のことです。

呉師はサウンドドラマ制作をマルチ再生を前提に当時から取り組んできました。スタジオ夜話番外編サラウンドのお話には当時から経験から得たものも掲載しました。

並河師同様次回から音に係る様々なお話を紹介します。

☆次回は

「音へのこだわり」II おかしなお話。スタジオ夜話的なエピソードをお話します。今回に続き筆者の恩師を紹介することにより「音へのこだわり」がより理解できるアプローチと信じています。

制作、演出関係の師匠の他に技術的な師匠も数多くいます大学研究室での最初の恩師、落合教授、TBS の加藤卓師、今回は併せて紹介したいと思います。

さて困難なご時世いっただいどう過ごしたら良いのでしょうか? 読者皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。次回もよろしくお祈りいたします。

— 森田 雅行 —